民俗学

６．きるー衣ー

菊地暁 folklore.lecture@gmail.com

０．モノへの問い

・民具：民衆が日常生活の必要から製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の総称

（宮本馨太郎 1972「民具」大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂）

・渋澤敬三（1896-1963）と民具研究、アチック・ミューゼアム（日本常民文化研究所）

１．原論：「着衣」の普遍性とその起源

・衣服の分類　・トップとボトム

・アウターとインナー

・体幹部と末端部（帽子、手袋、靴…）

・装身具（ピアス、ネックレス、ブレスレット、リング…）

・コンテクストによる分類（ex 晴れ着と普段着、制服、ユニフォーム…）

・衣服の役割：機能性と表現性

・不可欠ならざるもの／「人間的」なもの？

・一つの仮説：生物的「発情期」を喪失したヒトがその文化的操作のために導入した「記号」？

２．前近代：労働集約製品としての衣服

・糸を紡ぐ／布を織る・編む／（染める）／服を縫う・繕う→「女の仕事」

・布の貴重さ／布の呪力／縫うことの呪力

３．近代・現在：体型補正下着をめぐって

→自製品から既製品へ／天然素材から合成素材へ／機能性から表現性へ

１）科学の対象としての＜身体＞：素材技術の革新／不安定な身体部位の膨大な計測作業

２）行為の道具としての＜身体＞：西欧におけるコルセットからの離脱／日本における着用習慣の形成

３）表現のメディアとしての＜身体＞：洋装下着の受容＝身体観の受容／「谷間」の発見

４）制度の客体としての＜身体＞：商品化／グローバリゼーション／帝国の「身体計測学」

［文献］

宮本馨太郎 1968『かぶりもの・きもの・はきもの』岩崎美術社

小泉和子 2004『洋裁の時代　日本人の衣服革命』ＯＭ出版

菊地暁 2005「寄せて上げる冒険」菊地暁編『身体論のすすめ』丸善

小出由紀子・都築響一 2009『BORO：つぎ、はぎ、いかす。青森のぼろ布文化』アスペクト

都築響一編 2017『捨てられないＴシャツ』筑摩書房

［参考施設］

風俗博物館（京都市下京区筒法衣店５階）、ワコール企業博物館 Museum of Beauty（京都市西大路）

国立民族学博物館（大阪府吹田市）、神戸ファッション美術館（神戸市六甲アイランド）

ゴサガ（ペニス＝ケース）

去年（一九六三年）の一〇月、西イリアン中央高地の東玄関口に当たるワメナに、二〇歳のドイツ人と二四歳のオーストリア人が来た。ドイツ人は哲学、オーストリア人は美学専攻の学生だ。二人の青年は、パプアの〝哲学〟を研究するとかで、ワメナから三時間ほど離れたダニ族の部落に一週間住みこんだ。

哲学を知るには、現地人同様裸で生活しなければならんと、青年たちは考えた。二人は一糸まとわず素っぱだかになり、部落をうろついた。男たちはぶったまげ、女たちは家に逃げこんだ。この部落のチーフは、四八人の妻を持つ〝大富豪〟だった。青年たちの奇怪な行動をたしなめ、「せめてこれでも着たら」と、ゴサガ（モニ語）を与えた。ゴサガとは、男性の象徴のみにかぶせる円筒形のケースである。だが、二人はそれさえ拒んで、裸の生活による哲学研究をつづけた。ワメナ駐在のインドネシア警察は二人を逮捕し、西イリアンから追放した。

これは、ワメナの警察からきいた実話である。高地パプアは、素っぱだかで生活しているのでは決してない。ゴサガは、男の唯一の〝服装〟である。この服装を〝ぬぐ〟ことは、たいへん恥ずかしいと考える。二人の青年は、この点で重大なミスをした。ゴサガなしで部落をうろつくのは、文明国の町をヌードで歩くのと大差がない。

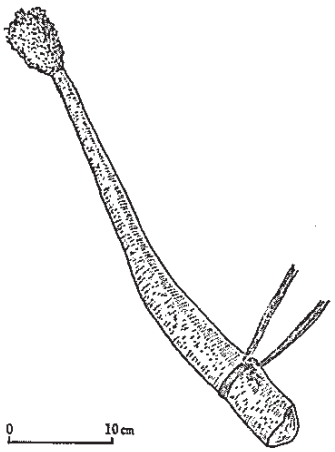
ゴサガは服装だから、流行もあれば個人の好みもある。ウギンバ村をはじめ、西イリアン中央高地の西部では、一般に巨大な筒が流行だ。しかしワメナなど東部のダニ族は、短くて細い筒が

喜ばれ、中には子供でなければ無理じゃないかと思われるような細い筒を使っているのもある。

個人の好みは、いろんなかたちで発揮される。先が曲がったもの。鼻につかえるほど長いもの。筒の先にクスクス（有袋類の小動物）の毛で作った房をつけたもの。ウギンバでは、私たちが捨てたビニール袋や紙クズも、喜んで筒の先につける。紙クズにしろ空き箱にしろ、文明の手の加わったものは一切珍しいから、テントの外へ投げたものは全部拾われてしまう。ゴミ捨て場などというものは存在しない。テントのまわりは常にきれいである。

ゴサガは、ヒョウタンを乾燥させた殻で作られる。ウギンバ村でも、だからたいていの家でヒョウタンを栽培している。ヒョウタンの長い蔓に青い実がつきだすと、男たちはその形をながめ、ゴサガになりにくいものは食用にする。自分の好みに合いそうな実ができると、棒を立てたり蔓草で結んだりして、いっそう理想的な形に矯正する。

ウギンバ部落の東に、ブナパという四家族八軒のモニ部



ゴサガ　ヒョウタン製。全長約50センチ。最大直径は4.5センチ。上部の飾りはクスクス（有袋類）の毛　根もと近くにつけた紐で腹にしばりつける。最下部にも紐の輪を作ってキンタマを通し、固定することもある。

てた。長州大工といっても私の郷里の山口県大島のものであった。ところが明治になって農家も瓦で葺いてよいことになると、長州の大工たちは民家の建築や屋根替えをするようになる。堂宮建築の技術がそのまま瓦屋根に応用できたからである。

それはひとり土佐だけのことではなく、これに似たような事例が各地に見られたのではなかったかと思う。草葺や麦稈葺が、時勢の変化によって何となく瓦葺にかわったのではなく、東北地方に長く草葺の家の多く残っていたのも屋根組技術を持った大工が少なかったためではなかろうかと思う。

そういうことになると、西日本には屋根組技術を持つ大工が多かった。比較的大きな都会が西日本には多かった。京都・大阪・堺・兵庫・姫路・岡山などをはじめ、城下町・港町が数多く見られた。その上堂宮の多い豊後の国東半島や京都・奈良・近江などがあり、そこには堂宮大工が多かった。幕末から明治へかけて多くの大工を出した土地はこれからしらべてみなければならないが、その人たちがどのような分野で、どんな活躍をしたかをしらべることはこれからの大きな課題になるように思うのである。

いったい世の中をかえていったのは誰だったのだろうか。この写真を見ていてそんなことを考えたのである。

家の屋根だけでなく、干してある洗濯物を見てもいろいろのことを考えさせられる。干されているものを見ると手縫いのものはないようである。いつの間にかわれわれが身につける下着はすべて購入品にかわってしまった。昭和三〇年頃までは干されているものを見ると手縫いのものが多かった。ミシンで縫ってあっても、自製のものが少なくなかった。ということは下着に一定の型がなかった。と同時に、つぎのあたっているものが少なくなかった。つぎのあたったものを着なくなったのは昭和三五年頃が境であった。そして多くの女性たちはあまりミシンをつかわなくなって来た。その頃までいたるところに見られた洋裁塾や洋裁学校が姿を消していった。

そしてその頃から流行が、自主的な意志によっておこなわれるよりも商業資本の企画によって左右されるようになって来る。今年は何がはやるかということが、前もってわかることになった。いつの間にか人間の意志がかすんだものになってゆきはじめた。

古い農家に住んでおちついた生活をしている人たちも、その生活の中に新しい商業資本の意志が浸透しつつある。ただ興の深いのはこの家の柿の木である。古い柿の木を持っている家は意外なほど多い。といっても柿の実をとってはいない。まだ枝に残っている。柿の実をとってたべることはなくなっても、柿の木は伐らないで残してある。この実の赤い